

男らしいリーダーの戦争

前田 健太郎

2022年2月のロシアによるウクライナ侵攻以後、数々の悲惨なニュースに接して胸を痛めた人は少なくないだろう。他方、政治論壇は活発である。なぜ、ロシアは戦争を起こしたのか。なぜ、民間人を巻き込んだ無差別攻撃に及んだのか。その原因として、ロシアの権威主義的な政治体制や、ソ連解体後の歴史認識問題などが指摘されてきた。その中で不思議と議論の焦点となっていないのは、この戦争がウラジーミル・プーチン大統領とその周囲の男性たちが取り憑かれた「男らしさ」の帰結だ、という可能性である。ロシアの内閣の写真を見ても、まるで日本のように男性がズラリと並んでいる。

ジェンダーの視点から見た場合、プーチンは特に男らしさを前面に出すリーダーとして知られてきた。上半身裸で猟銃をもつ写真を公開するなどといったメディア戦略は、ロシア社会におけるマッチョイズムを利用した権力掌握の手段として、研究者の分析対象にもなってきた。問題は、そのような振る舞いが、合理的な意思決定を妨げることである。というのも、男らしさを重視することは、単に肉体を誇示するだけでなく、往々にして、自分の実力を過信し、相手を侮る態度を生む。他国を屈服させるべく威圧的な態度を取っても、実際に軍事力が向上するわけではない以上、もし相手が引き下がらず、実際に戦争になれば、苦戦は必至であろう。そうなったとしても、自らの面子を保つためには簡単に引き下がることもできず、局面を打開するべく残忍な戦術を採用するしかなくなる。

しばしば、今回の戦争は、日本にとっても対岸の火事ではないという声を聞く。その大部分は、日本も隣国からの侵略に備えて軍備を増強するべきだという主張である。実に勇ましいが、どうだろうか。むしろ、私たちが今回の件から得るべき教訓は、「男らしい」リーダーを称揚することの不毛ではないか。その弊害を防ぐための何よりの方法は、現在の日本のように男性が政治権力を占有する現状を改め、男性と女性がともに統治に参画する道を開くことであろう。



PROFILE

まえだけんたろう：東京大学大学院法学政治学研究科教授。専門は政治学・行政学。2011年、東京大学大学院法学政治学研究科博士課程修了。博士（法学）。首都大学東京社会科学研究所准教授、東京大学大学院法学政治学研究科准教授、ソウル大学日本研究所客員研究員を経て2021年より現職。著書に『市民を雇わない国家－日本が公務員の少ない国へと至った道』（東京大学出版会、2014）、『女性のいない民主主義』（岩波書店、2019）。